

ワークショップ

DENVER II の我が国における標準化とその実践法

日本版 DENVER II による発達判定法

川 井 尚 (日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所)

はじめに

ここでは、発達のスクリーニング法としての「日本版 DENVER II」を親と子にとって意味あるものとして使うために、いくつかの基本となることを述べたい。要点は本法のもつ発達のスクリーニングの意味を理解することにある。そのために、まず、発達とは何かを理解し、その発達を知るためのひとつの技法である発達検査にふれ、発達検査と発達のスクリーニングを目的とする本法との相違を明らかにしたい。そして、本法を施行するに至るまでの過程が重要であることを述べたい。このことを理解することによって、本法を臨床的に有用なものとして使えると考える。

I. 発達とは

発達とは何か、リポート等の定義によると、「人間の生涯を通じて、つまり受胎から死に至るまでに生じる、身体的、精神的、そして社会的な機能のすべての変化である」とされている。ここで重要なことは、発達とは人の生涯にわたる3つの領域の変化の過程であるということである。従って、ある時期のみを切り取って発達をみてはいけないのであり、その変化の過程をみていくことが発達をみることといえる。特に、子どもは最も発達の变化を示す時期にあり、このことをよく心得ておく必要がある。ここで、極めて常識的なことにふれておきたい。発達と発育の違いである。すなわち、発達とは「機能の変化」をさし、発育とは母子健康手帳の発育曲線に示されるような、長さ(身長など)、幅(頭

囲・胸囲など)、重さ(体重)の増加をいう。

ところで、何が発達を生じさせるのか、そのメカニズムについて、表¹⁾に示すように、主に5つの発達理論がみられる。このなかに2つの対極的な理論があり、1つは、A. ゲゼルの「成熟論」で、神経の成熟プロセスが発達を生じさせ、環境、学習、養育は二次的な役割をもつとされる。一方、行動(学習)理論では、発達は学習機能のひとつであり、生物学的要因は行動の発達に限界を設定し、神経の成熟の役割は環境が提供するものを受け入れるように準備することにあるという。この2つの理論の拠って立つところは、際だって対極的であり、このいずれかで発達のメカニズムをとらえ得るとは考えられない。そこで、J. ピアジェの「認知理論」、すなわち遺伝による生物学的変化のプロセスである成熟と、環境との相互作用である経験と、情緒、態度、習慣、そして、社会的伝達の三者を発達の要因とし、これらを統一し調和、バランスを求める均衡化(有機体の特徴)によって発達は生じ進行する、この理論が妥当であると考える。以上、簡単に発達理論を紹介したが、その概要は文献¹⁾を参照されたい。

ここで強調すべきこと、すなわちDENVER IIの4つの発達領域は、リポート等の発達3領域とはほぼ重なっており、発達のスクリーニング法として妥当であると考えられる。

II. 発達検査とは

この発達の变化のある時期における運動、社会性、言語、生活習慣などから成る多元的、多因子的な発達の総合的な能力の程度を測定、評

表 代表的な発達理論とその発達メカニズム

発 達 理 論	何が発達を生じさせるのか
I. 成熟論 A. ゲゼル 1920年代	<ul style="list-style-type: none"> • 発達は遺伝によって与えられるプランに従った神経の成熟プロセスであり、その成熟が行動となって顕現する • 行動を生物学的に調節する成熟メカニズムを基底的構造といい、発達はこの構造の変化をいう • 環境—学習は成熟したときのみ効果が認められ、したがって環境、学習、養育は発達にとって二次的な役割を果たす • 生物学的要因に支配されるので、発達は秩序正しい順序で進行する • 発達の速さ、遅さはその個人の遺伝的背景によって決定される
II. 行動理論 1920年代 パブロフ ワトソン ソーンダイク 1940年代 ミラー ダラード 1950年代 スキナー シアーズ 1960年代 ベヤー ビジュー 1970年代 バンデューラ	<ul style="list-style-type: none"> • 発達は、学習機能の一つである。発達は学習の原理、法則を定着するプロセスである • 発達は、学習によって獲得した行動を統合し、階層的に組織化する結果として生じる • 発達は、さまざまなタイプの学習の結果である • 社会的学習理論、模倣とモデリング論—自ら経験しないものも学習できる—など • 生物学的要因は、行動の発達に限界を設定する • 成熟の役割は環境の提供するものを受け入れるように準備することである
III. 有機体論 H. ウェルナー 1940年代	<ul style="list-style-type: none"> • 定向進化説＝有機体の基礎は発生的、遺伝的であり、遺伝を発達の基礎におく • 発達はと全体的に未分化な状態から、分化的、階層的な統一性をもった状態へと向かうことである • 分化と統合の能力は遺伝するものであり、学習したり、教えられたりするものではない • 環境の働き <ol style="list-style-type: none"> ①環境内の変化に適応するための有機体プロセスの重視 ②環境との相互作用：個人の知覚を変えるためのフィードバックとして重要 ③学習とは経験を通して得た行動の内容や特定の行動レパートリィを規定するものである
IV. 認知理論 J.ピアジェ 1950年代	<ul style="list-style-type: none"> • 遺伝による生物学的変化のプロセスである成熟と、環境との相互作用である経験と、情緒、態度、習慣、社会的伝達の三者を発達の要因とし、これらを統一し調和、バランスを求める均衡化(有機体の特徴)によって、発達は生じ、進行する • 発達は、個体が環境に積極的に参加し、環境とやりとりをすることによって生じる • 発達は、自発的、自然発生的、必然的な一般的なプロセスである • 学習の役割は、ある技能や情報の獲得にあり、発達の一つの機能である • 発達は、段階から段階へと急激に変化する断続のプロセスである • 人は世界をいかに知るか、発生的認識論
V. 精神分析 1) J. フロイト 1930年代 精神性的発達論	<ul style="list-style-type: none"> • 発達は生物学的基礎を持つ欲求、緊張とその低減が重要な役割をもっている • 発達は力動的、構造的、連続・段階的なものであり、力動的成分が構造と段階に作用して生ずる • §力動的： <ol style="list-style-type: none"> 1. 本能(生物学的プロセスの心的表象、生の本能を用いて発達を維持し継続しようとするエネルギーとリビドー) 2. 心的エネルギー(①生物学的基礎をもつ、②総量は変化しない、③配分は生物学的欲求、発達段階、過去の経験、現在の環境によって、決定される、④無意識の一部) 3. 周期性(生物学的基礎をもつ欲求(緊張)→目標対象→目標指向的行動→欲求・緊張の低減→欲求) • §構造的： <p>イド(すべての生物学的構造) 一次過程の思考 → 自我、超自我の起源</p> <p>自我 二次過程の思考 → 欲求、緊張の低減の欲求、低減・満足を求める動機</p> <p>超自我</p> • §連続、段階的： <p>口脛、肛門、男根、潜在、性器期＝精神性的発達段階：これはパーソナリティの発達論である</p> <p>△異なった身体領域(性感帯)に心的エネルギーが集中することによって発達段階が生じる</p> <p>△発達段階の始まりと、各段階で生起する行動のタイプは、遺伝的・成熟的要因によって制限される</p> <p>△発達段階の内容は、発達が生起する文化による＝遺伝と環境の相互作用</p> • 発達段階の正常な移行が阻害されると、より以前の段階に固着が生じる。固着は人格形成に影響を与え、退行(リビドーの逆流)を準備する
2) E. エリクソン 1950年代 心理社会的発達論	<ul style="list-style-type: none"> • 心理的発達は、遺伝子に含まれた時間的な基本的プラン—漸成説的原理に基づく成熟プロセス—によって制限され、生物学的欲求と社会的要求・圧力との相互作用によって生じる • 心理社会的発達段階は、成熟プロセスによってまず一連の発達段階が準備され、この成熟が各段階の起動力となり、これに各段階の形成力としての社会的要求によって成立する • 生物学的欲求(フロイトの概念 イド)と社会的要求の葛藤(＝危機)の解決の仕方が発達を生じさせる力となる。葛藤解決に学習は一つの役割をもつ • 発達を進行させるものは、危機であり、自我(誕生時すでに萌芽として存在)は、この発達の危機を経験し、それを解決する構造をもつものである • 自我が、危機につまづき、危機を解決することができないと発達は妨げられる • ある段階の危機の解決の仕方は後の危機に関係するので、発達は階層的であり質的に異なる一連の発達段階を生じさせる • 危機をいかにうまく解決するかが、後の適応や発達を決定する

備するための方法として発達検査はある。ここで、注意すべきことはこの検査は発達診断のためのひとつの道具であり、これのみで発達を診てはいけなし、診ることはできない。

Ⅲ. 発達のスクリーニング

1. 発達スクリーニングとは

おもてだった発達の問題はみあたらないが、どこか「気になる子」と思われ、本当に発達上の問題があるかどうか、その気になることを確かめるための判定法をいう。ここで重要なことは「気になる」臨床的機能がなくてはならない。つまり、子どもの発達をよくみる観察眼がなくてはならないのである。気になってはじめてスクリーニング法であるDENVER IIを施行することになる。

2. 子どもの発達、「気になること」をとらえるための基本

1) その子のことは、その子の親、特に母親が小児に関わるどの専門家よりも一番よく知っていると思いたい。発達のスクリーニングの1番手は母親である。そこで、その子について母親からよく教えてもらうことが肝要である。母親は専門的な知識がないこともあり、しかし言葉にできなくとも、何か気にし、心配している。これは生物学的基盤を持つ母子関係に由来する母親ならではの働きが働いているとみてよい。そこで、「今」の、そして「今まで」の発達の様子をよく聴くことになる。「気になること」があれば、母親との共同作業で確かめていくのである。

2) さらに、できる限りプレイルームや保健センターなどのプレイコーナー、あるいは診察室などで、子どもと遊び、それを母親とともによくみることである。遊びながら、表情、仕草、身体の姿勢・動き・使い方、話一話し方・内容、情緒・感情の動きなど相談者がその子どもを体験し、さらに子どもとの関係をも体験する。そして、このことを母親にもよくみてもらうことである。このように、母親と共同作業をしていくなかで「気になる」、その程度の差はあるにしても両者が納得できれば、それを確かめるためのひとつの方法としてDENVER IIの施行を

提案する。このような経過を辿ることで、母親に施行に関する無用の心配、懸念を与えずにすむといえる。

そして、施行しその判定結果の総合的判断が「疑い」や「判定不能」とされたとき、それが本当なのかどうかそれを確かめるために再度施行することになる。ここでも、母親ないし保護者に無用な心配、不安を抱かせないように、今の気になる状態をわかりやすく具体的に伝え、それを確かめるために、その行動とその変化を一緒にみていくことを含めて施行へと進みたい。発達とは変化の過程であることを再確認したい。

この過程を経て、その子どものDENVER IIとこれまでの発達について検討を加え必要との結論がでたのち、はじめて次の段階に進むことになる。ここでは、神経学的検査をも含めた小児発達神経科医、行動観察・発達検査や母親の面接等を行う発達心理臨床家、あるいは言語領域など、子どもの状態によって多職種にわたる専門家により発達診断がなされる。この発達診断も、変化をみていくという基本をおろそかにしてはならない。そのうえで発達に問題があれば、その発達を継続的に援助するための専門機関につなげなくてはならない。ここまでのルートが整えられていなければ、発達スクリーニング自体の意味はないことになる。

以上がDENVER IIを使用する基本的な道筋であるが、「気になる子」に気づくかどうか、気づけるかどうかをはじめ、これまで述べたこと、ここに個々の専門家としての責務がある。

補 遺

現在、発達障害²⁾がクローズアップされている。マスコミで特集番組としてとりあげられることも多く、加えて、インターネットで容易に検索できその概要を知ることができる。そのためもあってか、親の関心も高い。うちの子はAD/HDではないでしょうかとの訴えで来所することもある。また、子どもの「今」と「これまで」、そして「これから」をしっかりと診ることなく「自閉症」ではとかの診断名を告げられ、混乱、苦悩する親も稀ならずみられる。

発達は大きな変化の過程なので、安易に診断

名をつけること，強いて言えば単なるレッテル張りは百害あって一利なしであることを強調したい。

おわりに

DENVER II による発達判定法を理解し，子どもと親のためにいかに有用に使うかについて，その概略を述べた。本法の施行に習熟することは欠かせず重要であるが，しかし，ひとつの道具であることをよく心得，これをいかに子ども

と親の利益になるように使うかは，ひとえに専門家としての人にかかっている。

文 献

- 1) 川井 尚. 小児科医のための発達心理学. 小児科 1991; 32(2): 179-184.
- 2) 川井 尚. 精神障害, 発達障害—いかに診て, 対応するか—臨床心理の立場から. 小児内科 2004; 36(6): 850-852.